

# 誰でも共有できる世界中の願い

「皆が夢見るのは、水の流れる故郷で耕して食を満たし、家族と一緒に平和に暮らすことです。その最低限の望みは、人間ならば誰でも共有できる世界中の願いでもあります。……内外ともに暗い世相であればこそ、敢えて人としての明るい希望を分かちたいと思います。」

——中村 哲 (ペシャワール会報102号・2009年より)

## 中村先生が今ここに

### ——一月のアフガン訪問記

PMS(ピース・ジャパン・メディカルサービス)総院長/ペシャワール会会長

村上 優まさる

#### はじめに

二〇二四年が始まったその日、能登半島地震が起きました。亡くなられた方、被災され復興が思うようにいかぬままで過ごされている方々を思う言葉ありません。心からのお見舞いを申し上げますとともに、一日も早い復旧をお祈りいたします。

この十年余りを振り返ってみると、東日本大震災、熊本地震、そして今回の能登半島地震と、甚大な被害をもたらす地震災害を目の当たりにしてきました。故郷を復興しようとする人々の思いに、共感と何かしなければという一体感が生まれます。アフガニスタンも昨年、一昨年と多くの死者を出す地震が続き、同じ思いをして過ごしてきました。できることはささやかですが、苦難を分かち合うという意味では日本でも、アフガニスタンでも同じです。

中村医師がペシャワールに赴任したのは四〇年前の一九八四年五月でした。二〇一

四年、それまでの三〇年を振り返りつつ中村医師は「アフガニスタンは戦争では滅びません。干ばつで滅びます、もっと正確に言えば、自然を無視する文明の無知と貪欲と傲慢によって滅びます」と述べています。そして十年後の今、猛暑、干ばつ、洪水、氷河崩落など自然現象は激しさを増し、誰もが気候変動・温暖化を切迫して感じるまでになりました。

ウクライナやパレスチナだけでなく戦争やその心配が広がり、核戦争の危機すら感じる昨今です。同時に国や人の間にある格差はさらに拡大しており、隣人を思う心を失ったのでは、と感じる時さえあります。中村医師は、「人として失ってはならない」良心と真心を信じ、訴え続けました。大切なことは「逆らえない摂理と自然の中で、身を寄せ合って生きていくこと」だと。

#### 深刻な三年続きの干ばつ

ペシャワール会は二〇二二年十二月に十



いよいよ完工を迎えるバラコット事業。水番小屋の屋上で、貯水池と耕作エリアを背景に、村上会長。(2024年1月20日)

二年ぶりのアフガン訪問を果たし、その後五回の訪問が実現しました。PMS支援室メンバーは通算して、一年間のうち六ヵ月近くを現地での活動に従事したことになります。タリバン政権が二〇二一年に復活し、戦闘が無くなり、治安が改善したことが、訪問できるようになったことの背景にあります。これが日本で報道されるアフガニスタンと実際に訪問して感じるアフガニスタンとの差異です。

今回、私たちがジャララバードに降り立ったのは、一月中旬。雨期であるはずですが、昨年十一月中旬より二ヵ月近く雨は一滴も降っておらず、大気は乾燥し、リキシ

ヤ(三輪タクシー)や車の排ガスで、遠くの山は霞んで見えない状態でした。降雪も例年よりはるかに少ないと報じられ、実際、山には雪がありません。三年続きの干ばつの深刻さは、容易に想像されます。

国際機関もアフガン全土が最大の干ばつに襲われると警告を発し、南部のカンダハルで活動するNGO「カレーズの会」のレシヤード先生は、冬季に全く雨が降らず、川の水がないと話されています。そのアフガニスタンにあって、ジャララバード周辺だけは麦の緑に溢れ、人々が行きかい、バザールは活気づいていました。PMSが手がけた水路がある地域は農業が安定しているためか、人々の生活もゆとりがあるように感じられます。

#### 堰・水路の現状

中村医師は会報二二二号(二〇一四年十月)で「アフガン東部の干ばつの現状と対策」と題して、干ばつへの具体的な対策を語っており、日本の山麓や扇状地にある「溜池」が中小河川での灌漑に役立つと言及しています。

中村医師は直接には手掛けることができませんでしたが、PMS技術者によって小河川からの灌漑が実現しました。ナンガラハル州の南部、スピンガル山脈(最高峰で五千mレベル)の麓にあるバラコットです。従来は、涸れ川のような小河川から導いた水で細々

と耕作していました。二〇二二年、村人の熱心な依頼を受けて工事を開始。今では台地に五〇m四方の池が造られました。そこに、上流の僅かな水や湧水を集め、山の中間を縫う四・三kmの水路からの水を湛えています。年に数えるほどの雨、時には鉄砲水や洪水をも取り込んで地下水を涵養するための池も造成されました。これから耕作するエリアには区画を示す石が置かれ、試験的に流した水を頼りに播いた麦の新芽が出ていました。水番小屋の屋上から、やがて緑となるエリアを見渡すと、夢がひろがります。

二〇二二年春に完成したバルカシコート堰は、二度の夏(増水期)を経て安定した様子でした。クナル河の本流も堰のある岸のほうに流れており、斜め堰、洪水吐き、土砂吐きが機能している様は、もう何年も経過したように見えて頼もしい限りです。

マルワリードI水路の取水口は、中村医師が生前計画していたように、三門から五門に増設、土砂吐きはコンクリート製に改修されていました。会報一一九号(二〇一四年四月)で、中村医師はマルワリードIIカシコート連続堰が完成した時のことを次のように記しています。

「現場職員は涙を流し、抱き合って喜び、互いに労苦をねぎらいました。みながこの連続堰の大切さを知り、一丸となって仕事に当たったということです。この瞬間に垣間

見た輝きは、どんな対立も忘れさせる圧倒的なものでありました」

ひとり静かに連続堰を見入っていると、中村先生が今ここに存在しているかのように感じられ、熱いものがこみ上げてきました。

### 中村先生の技術を引き継ぐ

バラコット工事終了後の候補地調査を行いました。ナージヤンはバラコットと同じくスピンガル山脈の山麓に位置し、涸れ川のような小河川があり、カレーズ（地下水路）からの水はあるものの、耕作が不安定になっています。

また、ガンベリ沙漠を車で二〇分ほど奥に入ったケシュマンド地域のイスラムダラ（溪谷）の灌漑に関しては、地元の長老三名と共に下見をし、堰堤や溜池の場所について意見交換や簡単な測量をしました。長老の一人は、麦播きができたのは六年前が最後だったと語っていました。背後は三千mクラスの山々で夏季の雪解け水はなく、冬季でも雪が減少し、今後いつまで水を得られるのかは予測不能で、時にくる鉄砲水に頼るしかありません。その意味では溜池への期待が大きくなっています。地元住民と協力的体制などを十分に話し合っ予定地を決める必要があります。

このような環境のもとで農耕をする人々の声を聞くたびに、この国の不幸を思わずにはいられません。地球温暖化による気候

変動は貧しい人々から全てのものを奪っています。

JICA（国際協力機構）がFAO（国連食糧農業機関）に出資しておこなうPMS方式普及事業は、FAOとPMSの意見の隔たりが大きく、工事の進め方への基本合意ができないままの状態が続いています。

昨年十月にナンガラハル州政府より緊急の依頼で手掛けたタンギトクチャー事業では、クナール河の増水によって洗掘された用水路と国道の補修を行いました。PMSの的確かつ素早い対応で難を乗り越えて復旧、州政府関係者も視察して賞賛していました。この用水路は外国の支援金で他団体が造ったもので、現代工法による取水門は度々土砂で詰まり、安定した取水ができず、住民が何とか水を導いていました。アフガニスタンの自然と生活に合う工法が最も大切であることの証です。

一方、ミラーン堰は河道が変り、急遽修復する必要があるということで、PMS技術者と日本の技術支援チームが意見交換して、工事が始まりました。中村医師の確立した技術や手法をアフガニスタン技術者と日本人の技師が引き継ぎ、共に工事を進めていく姿に感動しました。

### 将来への希望——ハンセン病対策も視野に

ナンガラハル州政府を訪問した際に、州の保健局長や知事からハンセン病対策への

協力要請の話が出ました。ハンセン病根絶計画から中村先生の事業が始まったことを考えると、ジャ医師や我々にとってもハンセン病対策への思いは強く、話は盛り上がりしました。大規模に始めることは現実的ではありませんが、検討に値する事案で、将来への希望が私たちを暖かく励ましてくれました。

一月二八日、ジャララバードを出発する朝から、雨がシトシトと二ヵ月ぶりに降りはじめました。カブールでは雪に変わり、その後大雪が降ったそうです。二〇二二年十二月の訪問時も、帰国するその日に雨と雪が降り始めたのを思い出しました。アフガニスタンでは少雨や雪は「良い天気」と言うそうです。良い天気を願わずにはおられません。東部アフガニスタンの一角ですが、人々の求めに応じ、中村医師の手掛けた医療、農業、灌漑の事業を継続し、展開できているのは、多くの心ある支援者と、ペシャワール会事務局で働く人々のおかげです。厚く感謝申し上げますと同時に、引き続きのご支援をお願いいたします。

### ▼未使用の切手、書き損じハガキ（官製ハガキ・年賀ハガキ）をお送り下さい

\*引き出しの中などに眠っているものをお送りいただければ幸いです。会報発送等に使用させていただきます。なお、外国の切手はお受けしておりません。